

動物カムイたちの「許されぬ恋」－神謡再考

荻原真子

キーワード：神謡 動物カムイ 散文説話「人と動物の婚姻譚」『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』

はじめに

大谷洋一氏の「カムイの散文説話―白ギツネ兄弟の物語」(『北海道アイヌ文化研究センター研究報告』第21号:27-44)は、アイヌの口承文芸、特に、神謡について再考する機会を与えてくれた。この話の骨子は「白ギツネ兄弟の兄が下流に住む村長の娘に恋をし、人間に化けて出かける。弟が先回りをして大きな雄犬に化け、兄を阻止する。あるとき兄は娘の魂を抜きとって帰る。弟がそれを奪い返し、死んだ娘の喉元にこすりつけて、蘇らせる。お礼に根元の尖った木幣をもらう。その先を兄に突き刺しながら、兄の非を論ず。弟は村長から感謝され、木幣や酒などを贈られ祀られると、弟ギツネが語った」というものである。その主旨は「人間は人間と、カムイはカムイと結婚するものだ」というところにある。

問題は「神謡・聖伝から折り返しの文句を取り去って多少散文的に語れば、そのまま神々の散文説話になる」という説[久保寺 1977:185-186]に対して、大谷氏は「先行研究の説が確かなものであれば、あらゆる「カムイの散文説話」の基になった「神謡」が存在することになる」として、「今後の課題は『カムイの散文説話』と『神謡』の二つのジャンルを比較するためのデータを蓄積することである」とする。神謡と散文説話の対照研究は重要であることには異論はないが、この解釈は余にも図式的に過ぎよう。問題は神謡からサケへを除く、引き算ではない。

アイヌ語を能くし、多くの優れたインフォーマントの女性たちとも知己を得て数々の説話を採録し、公にしてこられた大谷氏が、どうしてこれほどまでに先達の学術的な定式に拘泥するのであろうか。

口承文芸のジャンルは、ことアイヌのそれに限ってみても、作業仮説である。その言語世界で生きている人々にとって、ジャンルは極端な言い方をするなら、意識されているかどうか？¹ サケへをつけて聴き覚えた人はそのように語り継ぎ、ある人は話の筋を覚えていてそれを散文的に語るということ、或いはその反対に昔話や世間話にサケへを織りこみながら語るというようなことが現実にはありうるのだと想定できないであろうか。口承の大きな特徴は語り手の即興性にある。そのことは長大なユーカラの物語にいくつかの異伝があることから、また、語り手がいつも一言隻句違えずに同じ話をするのではないという実証や知見からも、また、ユーラシアの多くの民族にみられる英雄叙事詩

の伝承で個々の語り手の即興性が重んじられることにもうかがえる。さまざまな話や物語は語り手の個性や独創性によって変容しながら継承され、それが遍く共有され、また採録されてきた。それこそが「口承文芸」というものではなからうか。

アイヌの口承文芸研究がいつまでも先達の言説にとらわれ、それを批判的に検証することなく、その俎上に留まるかぎり、豊潤なアイヌの口承文芸を人類の文化として世界に開くことはできない。アイヌの口承文芸のこの上ない豊かさが多くの女性たちの闊達な創造的な才によって、女性たちの生活空間のなかで醸成されたであろうという想定を筆者は久しく抱いている。[荻原 2009 参照]

I サケへの問題

問題はサケへにある。サケへは神謡の必須条件であるというアイヌ文学史の命題の是非は問われなければならない。久保寺逸彦は『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』のなかでしばしばそのことのかかりで苦悶している。それは同様に採録の場面で語り手にとっても戸惑う問題であったことが窺える。そもそも口承の世界に生きてきた人々にとって、西欧由来の学問の手法をもってして相対峙されることが無謀だったのだと私たちはもっと早くに気づくべきであったと思う。それぞれの文化には、また、異なる思考や論理があるはずである。[荻原:2015] サケへは神謡の必須条件とされてきた。しかしながら、その逆は真ならず、サケへがあれば、すなわち、神謡とはならない。にもかかわらず、サケへのある話は悉く神謡の枠のなかに押し込められてきた。サケへばかりを照準にしている限りは、アイヌの叙事詩全般に視野を広げ、口承文芸として議論を展開することは難しい。実際に語り手が一つの物語をあるときにサケへを交えて語り、別の機会にはサケへなしで語ったとしよう。物語の内容、書き取られたテキストはほとんど同じである。にもかかわらず、前者は神謡、後者は散文説話であるという議論に、果たして何か本質的な意味があり得るであろうか？

神謡の特質はどこにあるのだろうか。それはサケへ形式論だけからはみえてこない。話の主題・テーマ、構成、そして散文説話や英雄叙事詩（詞曲）ユーカラとの比較など、アプローチを切りかえながら多角的に神謡を見なおすなら、サケへ必須論に偏重した議論の閉塞状況を打破することができよう。以下、この点から久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』（1977）について検証してみよう。因みに、この労作がアイヌの口承文芸にとってきわめて重要であるのは、その研究に真摯に向き合った著者の苦悶が諸処にみられ、その考察を後世に委ねているかに思えるからでもある。

II 神謡組成の多様性

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』には神謡 106 篇と聖伝 18 篇が収められている。

1) 神謡では動物神が叙述主体で、勸善懲惡をテーマとする詩篇がもっとも典型的であり、これを動物神話として区別することができる。それは 106 篇の大半、70 数篇を占めている。そのすべてにサケへはある。叙述主体には陸海の動物、蜘蛛（神謡 4）、蜚（神謡 30）、赤蝮（神謡 40）、蛙（神謡 41）、蚯蚓（神謡 42）など自然界のカムイのほか、想像上の生きものである竜蛇（神謡 37、38、39）、フーリ鳥（神謡 63、64、65）がある。自然界の範疇としては雷神（神謡 76、77）、蒼天の女神（神謡 79）、水の女神（神謡 81）がある。特例では火の媼神（神謡 1）があり、さらには、家の守護神（神謡 73）や船の神（神謡 69、70、71）の自叙があるが、それにはオキクルミが登場している。

例外的にサケへが未詳、忘失などで明らかでない話がわずかにある。「竜蛇の魔神の自叙」（神謡 39）、「年老いた鷺の自叙」（神謡 46）、「川鴉の神の自叙」（神謡 51）であるが、いずれも叙述主体が自然神であり、そのテーマや語りのスタイル、内容は神謡一般に共通している。（その他にもサケへが明らかでない詩篇があるが、そのテーマは動物神話ではない。）

2) 神謡の最も主要でかつ典型的な詩篇が云うなれば動物神話であるとするなら、むしろこれこそが神謡の本来でなかったろうかと考える。それは動物を主とする自然界と人間とのかかわりの在りようを説く道徳律がテーマである。そのほかの詩篇はそれとは性格を異にして、多様である。²

3) 自然界と人間界のかかわりという観点からいえば、火の姥神（神謡 1）が自叙する話は、その範疇からはずれよう。これは火の女神と水の女神が巫術競べをして 火の女神が水の女神に誘惑された夫をとりもどし、元のさやにもどるとい、いかにも人間くさい話である。

4) 蟬の自叙（神謡 34、35）とされている話では、語り手は蟬ではなく老爺である。その内容は人間が蟬になったという転生譚である。同様に赤雀の自叙（神謡 52）もメナシ（東蝦夷）の女が自殺した小沙流人を追って死に、赤雀になって啼きながら飛んでいるという話である。

相手の前身を明かして、怪しげな相手を退散させるとか、慰めるとか、或いは泣き止ませるとい、話は、神謡に限らずアイヌ口承文芸の特徴的で、また興味深いモチーフの一つである。

5) 神謡を起源とする子守歌（神謡 95～98）はそうした趣旨の、元は散文説話ではなかったかと思われる。なによりも、叙述主体は母親や媼であり、泣き止まぬ赤ん坊に、父親は和人のもとへ出かけ、や

がて渡り鳥の群とともに首無し鳥となって戻ってきたと語る。それはアイヌの社会が幾度となく経験したであろう悲惨な史実を秘めた転生譚、昔話であると思われる。子守歌のもう一篇（神謡98）は、妻に死なれたおじいさん（一般に昔話ではおじいさんは実のところ老齢ではないらしいが、）が泣き止まない赤子の娘をあやししながら海辺にいるとき、海上に現れたシャチ神に思わず子供を投げ与えてしまったという悲劇的な「先祖の昔噺（シンリツ オルシペ）」を、ある母親が泣いている赤ん坊に聞かせるという話である[久保寺 2004:309]。昔話としてはおじいさんの死を思い止ませようとする村人たちの対応がつづられるが、その後再婚したおじいさんが海幸に恵まれたというプロットは、北方に広くみられる「人と動物の婚姻譚」の一つ「乙女と水神」に組みする神話である。[荻原 2011参照]

6) 墓標起源譚が4篇ある（神謡 82~85）。いずれも自叙神未詳であるが、同じサケヘで歌われているから、対象が墓標というだけに話に対する人々の心もちは他の話の場合とは違っていよう。この話は、墓標が創世の段階で国造神コタンカラカムイによって天界からもたらされたとか、この神が手ずから作られたものであるという事物起源譚（タン ウパシクマ）である[久保寺 2004:274]。それに加えて男性の墓標につけられた黒い布と女性の墓標の赤い布がクマゲラ、水乞鳥もしくはホオジロカモになり、木の部分はカンボクとエゾニワトコの木になったという。この墓標起源譚は全体として一応コタンカラカムイの創世神話とみなすことができよう。

7) 自叙神未詳として「猿蟹合戦型物語」（神謡5）がある。別の伝承者による同工異曲は「蜘蛛の女神の自叙」（神謡4）、サケヘは「ノーペ」である。これは魔神の襲来を針男、栗男、蜂男、蛇男や杵男が撃退するという話である。日本の昔話との比較で、このアイヌの説話は「より古い南方起源を想定させる」一助となりうると久保寺は指摘している[久保寺 1977 : 55]。

8) やはり自叙神未詳の話に「月中の人」（神謡 72）がある。これは世界に広くある神話の一つであるが、シベリアの典型的な話で薄倅な孤児が救われて月の中に住むことになるのとは対照的に、水汲みを嫌った子供が罰として月につれ去られたことになっている。特徴的なのは、帰らぬ子供を探しにいった家人（？ 語り手）が通りすがりの魚たちに子供の行方を尋ねるが、魚たちは人間たちに浴びせられる悪態を理由に拒否する点である。異伝は金田一、知里（和田文治郎採録）によっても採録されている[久保寺 1977 : 332]

9) 人間の少年、女、狩人、染退人などが語る話がある（神謡 87~92、94、99~102）。動物神ではなく、雷神などの自然神でもない、人間が語る身上話が、どうして、ウウェペケルではなく、kamui yukar 神謡であるのか？—それこそが、サケへのなせる業である。サケへを付して謡えば、人間の昔話が神謡となる例であるが、その叙述主体をカムイとすることはアイヌの世界観にとんでもない混乱をきたすことになることに思い及ばなければならないはずである。

「十勝の老媼が啄木鳥を教え訓して歌った神謡」（神謡 93）にはサケへ（hau o u）があるが、その内容は、利別村のある老媼のもとへ迷い込んできた啄木鳥に飛んでいく先を教えたという伝聞体の話である。

10) シスタブカ媛やオタシュツ・媛が自叙する結婚をテーマとする、いわばメノコユーカーがある（神謡 104、105、106）。これもサケへをつけて歌ったばかりに神謡に区分せざるを得なかった例である。久保寺はこの3篇について「いずれも sakehe を持っている点で神謡にいられたが、sakehe なくして Yukar のように謡っていけば、婦女詞曲 Menoko-yukar, Mat-yukar といってよいものである。神謡がもととなって、やがて長大な英雄詞曲や婦女詞曲へ発達していく過程をしめしているものかも知れぬ」という[久保寺 1977:456]。この後者の定説的な想定がもはや成り立ちえないことは明白である。[荻原 2014 参照]。

以上、動物神謡が神謡の本質であるという想定のもとで、106 篇のテキストを検討してみると、動物神とわずかな自然神の神謡を除いて、多くの詩篇が多様な神謡や説話、メノコユーカー（英雄叙事詩）などに由来するものであることが明らかである。そのなかには日本ばかりでなく、広く北方や他の地域に類例や関連が想定される例がある。このように多元的で、また多様なテーマの説話がすべからず神謡とされてきた理不尽さは、まさにサケへという魔法の杖のなせる業であり、それを自在に操った語り手である女性たちの天賦の才というにふさわしい口承の成果でなかったであろうか。[荻原 2009 参照]

III 動物カムイの結婚譚と許されぬ恋

ここで冒頭に挙げた「白ギツネ兄弟の物語」に立ち返ってみよう。大局的にみるなら、この話は「人と動物の婚姻譚」という説話の一つのヴァリエーションである。日本の説話では「異類婚」として取り上げられているが、この「人と動物の婚姻譚」のテーマやモチーフは古今東西の建国神謡や民族・

氏族起源神話をはじめ、シベリアに限ってみても遍く拡がり、また多様な展開をみせている。「荻原 2006 参照」

1) 神謡のなかには恋愛や結婚をテーマとする話が少なくないが、その当事者は基本的に動物カムイではない。例外的に、当事者、すなわち、動物が自叙する恋の話は『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』には6篇ある。その叙述主体はでは蛭（神謡 32）、小鯨（神謡 19、20）、蜘蛛（神謡 36）、嘴細鳥（神謡 48）、葦鳥（神謡 53）で、小鯨を除くとみな女神である。このうち、「人と動物の婚姻譚」の系譜に近いのは小鯨が自叙する神謡 19（20 は異伝）であるが、後述のように厳密にはそれに組みしない。きわめて特異な例は神謡 32、36 の2篇であり、それに類するような例は北方周辺の諸民族のなかには見だし難い。神謡 48、53 は嘴細鳥や葦鳥の女神が奪われた夫を取り返す話で、神謡 1 の火の蛭神の話と基本的に同工異曲である。

さて、神謡 32「蛭の自叙」（サケヘ tūkana kana）は、「蛭の女神が黄金の頸飾りを明るく輝かせ、明滅させながら、海原を飛んでいって、鰈・鱈・イトウの家を順次訪れる。鰈は斜視なので、夫には出来ぬし、鱈は一本髭の醜男なのが堪らず、イトウは口が大きいのが気に入らず、飛び去った。最後に、カジキマグロを訪れ、その美男なのが気に入り、」夫婦になるという話である[久保寺 1977:172]。夏の宵に海原の上を飛んでいく蛭を追っているような幻想的な情景が目につかぶ美しい詩篇である。実際、蛭の出現する夏は、「ちょうど北海道の太平洋岸では、カジキマグロの漁期である」とあって、この話が人々の日々の営みの中から生まれ、謡い継がれてきたことが実感される。

神謡 36「蜘蛛の女神の自叙」（サケヘ shuarennā）は、もう少し人間くさい話である。蜘蛛の女神は「村主の梟神を夫にもちながら、醜男の夫に常に不満を抱いていた。あるとき、夫が催した酒宴の席で、招かれてきた客神の一人、鯨の若神に心を寄せ、」酒宴の後、鯨神の後を追って、その海中の家まで行く。が、鯨神の怒りをかけて殺されそうになり、逃げ帰り、夫にも叱られ、それ以来睦まじく暮らしたという話である。蜘蛛と鯨の組み合わせが、いかにも奇想天外である。どうして、このような発想があり得るのかと思われるが、神謡の世界はありきたりの想像を超えて実に愉快である。

2) 神謡にみられるもう一つの話では、動物カムイ・鯨神の相手が人文神とされているオキクルミの妹神である。そこでは、もう自叙神の思いは果たされることにはならない。

神謡 19、20「小鯨の神の自叙」（サケヘ inahō）は「小鯨の神がオキクルミの妹神の姿にあこがれて、沙流川を上って、その村へ行ったが、妹神の姿をみる事が出来ず、自分の家へ帰ってくる。ある夜、オキクルミの妹神が夢枕に立って、先に鯨の神が訪れた時、その身を黄金の胡籙に変じていた

ため、姿を発見されなかったこと、また、自分のことを詮めて、鯨の女を妻とするように、諭した。それ以来、オキクルミの妹のことはすっかり詮めて、暮らした」という話である[久保寺 1977:131]。原題は Pon repun-kamui yaieyukar で、小鯨と訳されているが、この鯨は小さいというよりは若鯨とするほうが適当であろう。

神話における動物カムイの典型的な恋話は 1)と 2)にみられる如くであるが、一般に多くのパリエーションをもつ「人と動物の婚姻譚」には婚姻が成就する場合と、そうでない場合がある。上記の若鯨の恋の相手は人間ではなく、人文神とされているオキクルミの妹神、すなわち、未だ現し身の「人間ではない」。鯨はその本来の海獣の姿で、川を上る。「砂の瀬のところを通っていくと、<ota-keperpe shuishuik shuishuik ikonisho chiure chiure>という音が聞こえ、石の瀬を通っていくときには、<shuma-keperpe shuishuik shuishuik konisho chiure chiure>というように聞こえてきた」と、心弾ませながら憧れの女神の許へ馳せる様子がいかにもリズムカルに謡われる。女神の姿に相まみえず川を下って行くときにもこの句は繰り返されるが、この神話は短いながら若鯨の恋心を歌って秀逸である。女神は「鯨は鯨の女と結婚すべし」と夢で告げ、いうなれば、自然界のあるべき姿を示す。オキクルミはしばしばサマイウンクルとともに動物カムイ自叙の神話に登場し、人間界とのかかわりのなかでカムイたちが如何に身を処すべきであるかをさまざまな形で教え示す。その意味でオキクルミ（サマイウンクル）は文化英雄である。

IV むすび 神話から散文説話？

動物はその自然界で配偶者を得るべきで、そこから逸脱してはならないという若鯨の神話のテーマは、アイヌの口承文芸の世界ではまた別途に展開して、パロディ的な説話を生み出している。つまり、動物は上記の若鯨とは違って、「人間」となって（変身といえるかどうかは疑問）人間世界へ闖入してくるようになる。北方における始原的な「人と動物の婚姻譚」では、動物は自然界において「ヒト」の姿で存在する。たとえば、熊は山上から人間界に降ってくるときには、熊の毛皮をまといやってくるのであり、その本来の世界では人間界と同じような「ヒト」とであると観念されている。この観念は北方諸地域の狩猟民文化に通底する本質的な特徴であるが、それは時代や社会・経済的要因などのもとで変容し、それを反映するような多様な説話が語られるようになる。[荻原 1993、1995 参照]。

冒頭に挙げた「白ギツネ兄弟」の説話では、白ギツネの兄が下流に住む村長の娘に恋をし、人間に化けて出かける」。白ギツネはもはや狐としてではない。この話に類する説話はアイヌの口承文芸に

は少なくない³。例えば、「白キツネ兄弟」の類話として、サハリンアイヌには「狐神人妻の魂を盗む」（狐神が自ら語る）、「鯨神と妻を争う」（ルルパの首領自ら語る）という話があり、いずれにおいても鯨や狐のカムイが人間の男性と競合し、あるいは、人間の女性を誘惑しようとして失敗する〔知里 1973：265－270；274－284〕。神謡と散文説話の関係という観点から結論をいえば、このような説話に対応する神謡を見いだすことはとうてい無理であろうと思われる。その理由は、この説話が動物カムイ叙述の神謡がもっているテーマや理念もしくは世界観とは相入れないからである。強いて考えるなら、神謡 19（20）の若鯨がオキクルミの妹に対する思慕の詩篇が想起されないわけではないが、積極的にいえば、この狐神や鯨神の話は動物が人間に化して人間と情を交えようとする北方に広く流布する「人と動物との婚姻譚」の系譜に属し、その変容、すなわち、その婚姻を退けようとする語り手社会の心理的な傾向を示す説話であると云えよう。

神謡の再考を踏まえて、ここで指摘しうることは、神謡を一元的な起源とするアイヌ口承文芸成立の定説が今なおアプリオリに踏襲されていることが問題であり、そこから逸脱しようとする意識的覚醒が真の意味でのアイヌ文化研究に求められるということに尽きよう。

¹ 口承文芸のジャンルについては諸民族に固有の分類がみられる。その多くは学術的な分類とは異なり、大きく二つないし三つが区分されている。〔荻原 2013〕

² 旧著において動物を叙述主体とする神謡の類型について次のような分類を試みた〔荻原 1997：394－477〕。

I 動物世界と人間世界との関係をテーマとする神謡

- | | |
|-----------------|-------------|
| a 型 負の行為—遺戒 | b 型 正の行為—垂範 |
| c 型 儀礼の説明、崇拜の由来 | d 型 由来譚 |

II 求婚・婚姻をテーマとする神謡

- | |
|-------------------|
| e 型 動物神と動物神との婚姻 |
| f 型 動物神と半神半人との婚姻 |
| g 型 人間のユーカラに準ずる類型 |

III その他

- h 型 身上話

この類型分類の試みにはアイヌラックルやポイヤウンベなどを主人公とする英雄叙事詩、散文説話との比較の視点がなく、神謡をアイヌの口承文芸全体のなかでどのように特徴づけるかという考察があらためて必要であろうと考える。

³ また、北海道の各地に熊や狼などとの婚姻を語る昔話がある。例、「熊と狼にほれられた男」（日高

静内町豊畑) [更科 1970 : 97-101]。それについて中川はつぎのように指摘している。「さまざまな縁で人間は特定のカムイと特定の関係を結ぶ。その事情を自分の子孫に語り伝えることによってその関係を守ろうとしたのが、これらの話ではないだろうか。そしてそれは、自分たちの家伝として伝えられているかぎりにはウパシクマなのだが、それが他の人の耳に入り、他の地域で語り伝えられると、散文説話として文学の仲間入りをするのである」 [中川 1997 : 126-127]。

参考文献

久保寺逸彦

1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店

荻原真子

1993「北東シベリアにおける〈結婚しながらない娘〉の伝承」(岡田宏明編)『環極北文化の比較研究』(北海道大学文学部)

1994「人と動物の婚姻譚—サハリン・アイヌの説話から」『日中文化研究』第6号(古代伝承と考古学) 勉誠社

1995「『人と動物の婚姻譚』の背景と変容—ユーラシア東端地域の場合について」『比較神話学の展望』青土社

1996『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』草風館

2006「人と動物の婚姻譚--王権神話から異類婚姻譚まで」『説話・伝承学』14 :

2009「女性の語りの妙—カムイユカラ(神謡)の問題」『口承文芸研究』第32号 : 109-113

2011「狩人と『女神』—伝承のなかの自然の主」(篠田知和基編)『愛の神話学』楽瑯書院:395-407

2011「乙女と水の主:水神への犠牲」(篠田知和基編)『神話・象徴・図像1』楽瑯書院:147-156

2013「ユーラシア口承文芸の二つの様態」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第15号 : 1-9

2014「アイヌの叙事詩「メノコユカラ」(婦女詞曲)—若干のテキストについて」『口承文芸研究』第37号 : 127-140

更科源蔵 (編)

1971 (1963)『アイヌ民話集』北書房

1971『アイヌ伝説集』北書房

-
- 1981『アイヌの神話』（『アイヌ関係著作集 III』） みやま書房
知里真志保
- 1973「樺太アイヌの説話（一）」『知里真志保著作集 I』 平凡社
中川 裕
- 1997『アイヌ物語世界』 平凡社
本田優子編
- 2010『伝承から探るアイヌの歴史』 札幌大学附属総合研究所
(おぎはら しんこ・千葉大学名誉教授)

Forbidden Love of Animal-*kamu*
– Rethinking of Ainu *Shin'yo* (Song of Animal Gods)

OGIHARA Shinko

Summary:

The idea proposed by the preceded authorities of Ainu culture concerning the relation of *Shin'yo* (Song of Animal Gods) and *Uwepeker* (prosaic tale) has been shared by researchers up to nowadays. The key of this discussion lies in the refrain “*sakehe*”, that is repeated typically in chanting *Shin'yo*. It has been usual that any kind of tale with “*sakehe*”, nevertheless what the sort of theme or content, are automatically classified as *Shin'yo*.

The author of this paper once discussed that the main cluster of the *Shin'yo* could be the animal myth that defines basically the animal-human relations. On this preposition she tries to reexamine the verses of *Shin'yo* in the work of Itsuhiko Kubodera “*Ainu Jojishi: Shin'yo Seiden no Kenkyu*”(A Study of Ainu Epic: *Shin'yo, Seiden*: 1977, Tokyo) and finds that the majority of them are either prosaic tales or *menoko yukar* (female epos), or of other origin.

As for the example “Tale of white fox brothers” that tells a false love of a fox that transformed into a man toward the sister of *Okikurumi* (probably a culture hero in the Ainu tradition), we could hardly find parallel story in *Shin'yo*; the essential idea of that tale is far from *Shin'yo* as animal myth. The “Tale of white fox brothers” with some versions of the Sakhalin Ainu should be discussed otherwise as a version in “human-animal marriage tale” cycle that is widespread among the peoples of the North.